

母親の養育態度と娘が母親に向けた感情・認知の関連 — 思春期から青年期にかけての変化に注目して —

三輪 可那子・藤崎 春代

Relationship between mothers attitude to their upbringing and daughters emotions and cognition: Focusing on changes from puberty to adolescence

Kanako MIWA and Haruyo FUJISAKI

This study focused on the mother-daughter relationship and examined the relationship between mothers upbringing attitude and daughters emotional and cognitive attitude toward their mothers. We extracted three factors related to the mothers' attitudes to their upbringing, which were intercorrelated. Therefore, we classified mothers' attitudes to their upbringing into five types. The five types were "refusal," "protection," "moderate," "neglect," and "interference". The three factors we identified were related to emotions and cognitions of mothers; "trust," "feelings of conflict," and "parental cognition as a human being." As a result of examining the relationship between the two, it was shown that daughters of "protection," "moderate" and "neglect", who were not highly aware of the negative and submissive aspects, have less confrontational feelings with their mothers in adolescence than in puberty. On the other hand, daughters of "refusal" and "interference", who were strongly aware of the negative and submissive aspects, had less trust in their mothers and more feelings of confrontation. The level of cognition of negative child-rearing attitudes was associated with trust in the mother and feelings of conflict in puberty and adolescence.

Key words : *attitude to upbringing* (養育態度), *daughter's emotions and cognition* (娘の感情・認知),
mother-daughter relationship (母娘関係), *puberty* (思春期), *adolescence* (青年期)

問題と目的

家族、とりわけ親との関係で悩んでいる人は多く存在する。その理由として、血のつながった関係というのは、決して別れられない関係であることに加え、相手との一体化が強いこと（海原, 2008）が挙げられている。香山（2010）は成人においても、母親の顔色を気にする子が多いと指摘をしている。親子関係の性別組合せによる特徴の違いについて、富吉（2011）は、母娘の支配・被支配関係に着目して、多くの文献検討を行い、母娘関係が、母息子関係、父娘関係、父息子関係のいずれとも異なっていて、際立って特異であると考察している。母娘関係と娘の自我同一性地位との関連を検討した水本・山根（2011）は、母娘関

係を「母親との信頼関係」と母親との信頼関係を基盤とした親和的關係性を土台として発達する「母親からの心理的分離」の高低から4つのタイプに分類している。その結果、「母親との信頼関係」と「母親からの心理的分離」のどちらも高いタイプの娘は、親や社会の価値概念を迷いなく受け入れ現在に自己投入して適応している一方で、「母親との信頼関係」と「母親からの心理的分離」のどちらも低いタイプの娘は、現在にも将来にも自己投入ができていないことが示されている。娘が認知している母親との関係は、青年期の娘の社会への適応や将来への見通しなどに関連すると考えられる。これらの研究結果を踏まえ、本研究では、青年期の娘の母娘関係に焦点をあてることとする。

青年期後期における青年の親への態度・行動尺度を作成した小高 (1998) は、「親からのポジティブな影響」、「親との対立」、「親への服従」、「親との情愛的絆」、「1 人の人間として親を認知」の 5 因子を見いだした。5 因子の因子間相関から、親からポジティブな影響を受けていると認知している青年ほど、親に服従し、親との情愛的絆が強いとされており、親への服従をしている青年ほど、親との情愛的絆も強いとしている。小高 (1998) の研究では、親への服従と親との情愛的絆の関連の強さが示されているが、親に服従していた子が、成長とともに親を疎ましく思うこともあるであろう。香山 (2010) は、中年期になり子育てがひと段落した段階で、母親に対して憎しみを抱くようになった女性の例を挙げている。こうした例からは、子が青年期以降になってから、それまでの親との関係を振り返るなかで、親に対して拒否的もしくは、対立的な感情を抱く可能性があることが窺える。中学生、高校生、大学生、大学院生を対象に、子の育ちにとまなう親子関係の変化を検討した落合・佐藤 (1996) の研究では、思春期では子が自立するよう親は自分の保護下から子を離そうとしている関係であったものが、青年期では親が子を 1 人の人間として頼りにする関係へと変化していた。つまり、思春期と青年期とでは親にとっての子が、守らなくてはいけない存在から、一人の人間として頼れる存在に変化していくと考えられ、親の変化を子も感じ取っている可能性がある。そこで本研究では、親との関係が変化していくなかで、子は親に対しての感情や親への認知を変化させると仮定し、思春期と青年期の子の親に対する感情・認知の変化を検討することとする。

親子関係を考えるにあたり、本研究では親側の要因として親の養育態度に着目する。養育態度についての研究は古くから行われており、そのなかで多くの尺度が作られてきた。品川・品川 (1958) は、養育者の養育態度について調査をするため、田研式親子関係診断テストの作成を行った。親の養育態度は、「拒否」「支配」「保護」「服従」「矛盾・不一致」の 5 つの態度に分けられ、下位因子は各 20 項目から構成されている。田研式親子関係診断テストの再評価を行った赤坂・丸木・鈴木・根津 (1984) の研究では、子による父親・母

親それぞれの養育態度の認識と、父親・母親自身による養育態度の認識とを比較検討した結果、父親よりも母親の方が子の認識とのずれが少なかったとしている。娘が母親に対して感じる感情や母親の生き方などへの考え方は、娘が認知している母親の養育態度を基盤としているものと考えられる。そのため、本研究では、娘に母親の養育態度について尋ねることとする。

以上を踏まえ、本研究では親子関係の中でも母娘関係に焦点を当て、娘のとらえる母親の養育態度と娘の母親に向ける感情・認知の関連を検討する。特に、第 2 次反抗期がある思春期と、社会人としての自覚を持ち始める青年期での娘の母親に向ける感情・認知の変化に注目する。

方 法

調査時期と調査対象

調査は、2020 年 7 月 22 日から 27 日に実施された。子どものいない 20 代の女性 360 名を対象とした。明らかに虚偽の回答をしていると思われる回答者等を分析の対象外とし、316 名が有効回答者となった (平均年齢 23.0 歳、標準偏差 2.06)。

調査方法

民間の調査会社である (株) サーベロイドに調査を依頼し、子どものいない 20 歳から 26 歳までの女性 360 名にオンラインアンケートを実施した。回収数を指定し、360 名が回答を行った時点で、調査を終了した。

倫理的配慮

昭和女子大学倫理審査委員会にて審査を受けた (許可番号 20-06)。アンケートを配信する際には、(株) サーベロイドから、アンケートの内容について審査を受けた。

質問紙の構成

- (1) フェイスシート 年齢の記入を求めた。
- (2) 母親との同居形態 回答者の中には母親がいないこともあるため、同居、別居以外にその他を選択できるようにした。本論文では、字数の関係上、同居別居別の分析は行わない。
- (3) 母親の養育態度尺度 品川・品川 (1958) の親子関係診断テストを参考に、「拒否的養育態度」「支配的養育態度」「保護的養育態度」「服従的養育態度」「矛盾的養育態度」での 5 因子を想定し

た34項目4件法で作成した。

(4) 母親に向ける感情・認知尺度(青年期版) 青年の親への態度・行動尺度(小高, 1998)を参考に、「同一視」「対立感情」「1人の人間としての親認知」「信頼」の4因子を想定した30項目6件法で作成した。

(5) 母親に向ける感情・認知尺度(思春期版) 母親に向ける感情・認知尺度(青年期版)を過去形にした。

結果と考察

母親の養育態度尺度の作成

34項目に対して主因子法による因子分析を行った結果からは、固有値の変化から2因子構造が妥当であると考えられた。しかし、親子関係診断テスト(品川・品川, 1958)が5因子であり、本研究でも5因子を想定していたことから、3因子以上の下位因子の抽出を試みた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示

Table 1 母親の養育態度尺度の因子分析結果

	I	II	III	想定因子名
第1因子 否定的養育態度 ($\alpha = .95$)				
24. 母は、言われた通りにしないと叱る	.91	-.16	.09	支配
23. 母は、私に対してうたぐり深い	.85	-.03	.08	拒否
20. 母は、私のしたことについて、とやかく言う	.83	-.06	.14	支配
27. 母は出先と家の中とは、私に対する態度が違う	.83	.00	-.08	矛盾
26. 母は、私によく小言を言う	.79	-.10	.18	拒否
1. 母は、自分がよいと思っていることを、私に無理やりやらせる	.78	-.16	.18	支配
15. 私のしていることを、母は見張っている	.77	-.03	.17	支配
18. 母は、私の良いところを見ないで、悪いところばかり見ている	.75	.11	-.20	拒否
9. 母は、私の友人関係に口を出す	.70	-.02	.22	支配
34. 母は、私によその子と比べてできないと言う	.69	.04	-.07	支配
5. 母は気分によって、私への接し方が変わる	.68	-.10	-.06	矛盾
7. 同じことをしても、その時々で怒られたり、そうでなかったりする	.68	.05	-.11	矛盾
12. 母は、私の頼みを聞いてくれない	.67	.14	-.33	拒否
32. 母は日頃、私に口うるさく言いながら、私が相談をしようとする面と面倒くさがる	.67	.17	-.27	矛盾
6. 母は、私を邪魔者扱いする	.67	.07	-.32	拒否
3. 母は、私の欠点を気にする	.66	-.09	.05	拒否
29. 母は、礼儀、決まり、勉強などをやかましく言う	.63	-.12	.25	支配
21. 母はいつも私の世話をやくが、ときによって「1人でできないの」と怒る	.60	-.23	.21	矛盾
11. 母は私に相談をしないで、私のことについていろいろなことを決める	.49	.23	.00	支配
第2因子 服従的養育態度 ($\alpha = .78$)				
10. 母は、私を怒らないで褒めてばかりいる	-.15	.68	.12	服従
14. 母は私にねだられると、私の言う通りにする	-.03	.66	.16	服従
33. 母は、私の考え通りになんでもする	.09	.65	.09	服従
25. 私が悪いことをしたり約束を破っても、母は何も言わない	.07	.56	-.13	服従
28. 私が母の手伝いをしなくても、母は何も言わない	-.09	.52	.05	服従
8. 私ができることでも、母は手伝う	.02	.47	.33	保護
第3因子 保護的養育態度 ($\alpha = .80$)				
30. 母はいつも私のことを心配している	.09	-.04	.76	保護
22. 私が病気になるように、母は気を付けている	.04	.07	.65	保護
31. 私が少しでも困ることがあると、母はいつも助ける	-.16	.25	.64	保護
16. 少しの怪我や病気でも、とても心配して看病する	.19	.26	.56	保護
因子間相関				
I	—	.33**	.02	
II		—	.46**	
III			—	

す。なお、回転前の3因子で34項目の全分散を説明する割合は52.57%であった。第1因子は、事前に想定していた「支配的養育態度」「拒否的養育態度」「矛盾的養育態度」の3つの因子が混ざり合ったものであり、娘の生活や行動などに母親が批判・支配をする、娘からの働きかけを無視する、場面によって態度を変えるといった内容の項目が高い負荷量を示していたため、「否定的養育態度」因子と命名した。第2因子は、事前に想定していた「服従的養育態度」と項目が一致しており、母親が娘に服従をしているような内容の項目が高い負荷量を示していたため、「服従的養育態度」因子とした。第3因子は、事前に想定してい

た「保護的養育態度」と同じ項目から構成されており、母親が娘を心配し保護するような内容の項目が高い負荷量を示していたため、「保護的養育態度」因子とした。

母親に向けた感情・認知尺度の作成

母親に向けた感情・認知尺度（青年期版）の30項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化から、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定した主因子法・Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 2に示す。Table 2において、想定因子は「同一視」を同、「信頼」を信、「対立感

Table 2 母親に向けた感情・認知尺度（青年期版）の因子分析結果

	I	II	III	想定因子名
第1因子 信頼 ($\alpha = .96$)				
13. 母の生き方に同感し、私もそのようにしたい	.99	.21	-.33	同
19. 母のような人間になりたい	.96	.05	-.20	同
23. 母は私の心の支えである	.94	.02	-.07	同
27. 母といるだけで何となく安心できる	.94	.03	-.08	同
17. 私が判断に迷ったとき、母の意見を取り入れたい	.87	.02	.01	同
2. 私が何かを決める際、母の意見は十分参考になると思う	.83	.03	.01	同
28. 母の子でよかったと感じる	.83	-.07	.11	信
30. 母を尊敬している	.83	-.06	.12	信
11. 母を信頼している	.79	-.10	.15	信
24. 母の愛情を感じる	.79	-.06	.17	信
21. 母が好きである	.75	-.13	.17	信
1. 母に対して親孝行したい	.70	-.09	.20	信
6. 私の価値観には、母の価値観が反映していると思う	.41	.32	.19	同
第2因子 対立感情 ($\alpha = .91$)				
14. 母の態度を押しつけがましいと感じる	.03	.90	.01	対
15. 母に対して苛立ちを感じる	-.03	.87	.04	対
9. 母はいちいち私のことについて口出しをして、嫌だと感じる	.15	.83	-.04	対
22. 母の考えは、馬鹿げたものだと思う	-.02	.83	-.04	対
26. 母は身勝手な人間だと思う	-.15	.79	.07	対
29. 母に期待されていて窮屈を感じる	.21	.79	-.11	対
5. 母といると気詰まりを感じる	-.11	.78	.13	対
3. 母の言動によってイライラする	.00	.75	.17	対
第3因子 1人の人間としての親認知 ($\alpha = .83$)				
16. 母と私の人生は違う	-.19	.05	.93	人
25. 母と自分は別の存在だと思う	-.11	.06	.92	人
20. 自分の生き方は母の生き方とは別の独自のものだと思う	-.05	.08	.87	人
4. 母も1人の人間だと思う	.20	-.08	.72	人
12. 母も1人の人間だと思って接したい	.24	-.08	.70	人
8. 母のことを1人の人間として客観的に見ている	.24	.09	.59	人
因子間相関	I	II	III	
I	—	-.23**	.63**	
II		—	.02	
III			—	

情」を対、「1人の人間としての親認知」を人として示した。なお、回転前の3因子で34項目の全分散を説明する割合は71.45%であった。第1因子は、事前に想定した「同一化」と「信頼」が混った因子であり、母親を尊敬し、母親のようになりたいと考え、母親を頼りにするような内容の項目が高い負荷量を示していたため、「信頼」因子と命名した。第2因子は、事前に想定した「対立感情」と項目内容が一致しており、母親に対して対立の感情を抱いていると思われる内容の項目が高い負荷量を示していたため、「対立感情」因子とした。第3因子は、事前に想定した「1人の人間としての親認知」と項目内容が一致しており、自分と母親は別の存在であるとし、母親を1人の人間として認知していると思われる内容の項目が高い負荷量を示していたため、「1人の人間としての親認知」因子と命名した。

比較を行うため、母親に向ける感情・認知尺度(思春期版)については因子分析を行わず、母親に向ける感情・認知尺度(青年期版)と同じ因子構造とした。「母親に向ける感情・認知尺度(青年期版)」との区別のため、「信頼(思春期版)」「対立感情(思春期版)」「1人の人間としての親認知(思春期版)」と記す。 α 係数を算出したところ、「信頼(思春期版)」で $\alpha = .96$ 、「対立感情(思春期版)」で $\alpha = .91$ 、「1人の人間としての親認知(思春期版)」で $\alpha = .83$ と十分な値が得られた。

母親の養育態度と母親に向ける感情・認知の関連

娘がとらえる母親の養育態度の側面と娘が母親に向ける感情・認知の関連について、母親の養育態度尺度の下位尺度と母親に向ける感情・認知尺

度(青年期版・思春期版)の下位尺度の相関から検討した(Table 3)。青年期版、思春期版ともに、「否定的養育態度」と「信頼」の間に負の相関、「対立感情」との間に正の相関がみられた。また、「保護的養育態度」と「信頼」の間に正の相関があった。青年期版においては、「否定的養育態度」と「1人の人間としての親認知」の間に負の相関、「服従的養育態度」と「1人の人間としての親認知」の間に負の相関がみられた。娘は母親の否定的な態度を認識すると、母親が自分を受け入れようとする姿勢が感じられず、思春期のみならず青年期においても母親に対する信頼を持ちづらく、対立感情を抱きやすいと推測される。一方で、母親の保護的な態度を認知している娘は、母親が自分を気にかけていると感じられるために思春期・青年期ともに母親に対する信頼を抱きやすいと考えられる。青年期においては、母親の否定的もしくは服従的な態度を認知するほど、母親を1人の人間として認知しづらいことが示されている。

次に、母親に向ける感情・認知尺度(青年期版)と母親に向ける感情・認知尺度(思春期版)の得点の相関をみると、「信頼」は「信頼(思春期版)」との間に強い正の相関があった。「対立感情」は「対立感情(思春期版)」との間に強い正の相関がみられた。「1人の人間としての親認知」は、「1人の人間としての親認知(思春期版)」との間に中程度の正の相関があった。思春期と青年期の相関では、信頼と対立感情において強い正の相関があり、思春期に母親を信頼している娘ほど、青年期においても母親に対する信頼は厚いと推測される。また、思春期のときほど抱かなく

Table 3 母親の養育態度尺度および、母親に向ける感情・認知尺度(青年期版・思春期版)の相関

	母親の養育態度尺度			母親に向ける感情・認知尺度(青年期版)			母親に向ける感情・認知尺度(思春期版)		
	否定的養育態度	服従的養育態度	保護的養育態度	信頼	対立感情	1人の人間としての親認知	信頼	対立感情	1人の人間としての親認知
否定的養育態度	—	.33**	.02	-.52**	.48**	-.29**	-.41**	.46**	-.11*
服従的養育態度		—	.46**	-.05	.03	-.23**	-.04	.03	-.19**
保護的養育態度			—	.32**	-.09	.11*	.32**	-.06	.05
信頼(青年期版)				—	-.23**	.63**	.83**	-.15**	.40**
対立感情(青年期版)					—	.02	-.20**	.71**	.12*
親認知(青年期版)						—	.49**	.14*	.69**
信頼(思春期版)							—	-.18**	.46**
対立感情(思春期版)								—	.31**
親認知(思春期版)									—

** $p < .01$, * $p < .05$

なったとしても、思春期に母親に対して対立感情を抱いていた娘ほど、青年期においても母親への対立感情を強く抱いていると考えられる。

母親の養育態度のタイプ分類

Table 3において、母親の養育態度尺度の下位尺度間に相関があったため、クラスタ分析を行い、母親の養育態度のタイプ分けを行った。母親の養育態度尺度の「否定的養育態度」得点と「服従的養育態度」得点、「保護的養育態度」得点を用いて、対象者間の非類似度を平方ユークリッド距離で定義し、Ward法によるクラスタ分析を行い、5つのクラスタを抽出した。第1クラスタには23名、第2クラスタには73名、第3クラスタには113名、第4クラスタには72名、第5クラスタには35名の調査対象が含まれていた。人数比の偏りを検討するために χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りが見られた($\chi^2 = 80.14, df = 4, p < .001$)。母親の養育態度の各クラスタにおける母親の養育態度尺度得点の平均値および標準偏差、および各下位尺度得点の差の検定結果(F値と多重比較結果)をTable 4に示す。

第1クラスタは他のクラスタに比べて、「否定的養育態度」得点が最も高く、「服従的養育態度」得点および「保護的養育態度」得点が低いという結果となった。このクラスタは、母親の養育態度を、行動や考えについて否定をしていくことが多いなどの母親中心の養育態度であると認知している傾向があると考えられるため、〈否定〉タイプとした。第2クラスタは、5つのクラスタのなかで、「保護的養育態度」得点が最も高く「否定的養育態度」得点が低く、「服従的養育態度」得点は中程度という結果となった。このクラスタは、母親の養育態度を、時には娘の言うことを聞きながらも、娘を心配し保護しようとするといった娘中心の養育態度であると認知している傾向がある

と考えられるため、〈保護〉タイプとした。第3クラスタは、5つのクラスタのなかで、「否定的養育態度」得点、「服従的養育態度」得点、「保護的養育態度」得点のいずれも中程度という結果となった。そのため、このクラスタを〈中間〉タイプとした。第4クラスタは、5つのクラスタのなかで、「否定的養育態度」得点、「服従的養育態度」得点、「保護的養育態度」得点がいずれも低いという結果となった。このクラスタは、母親の養育態度を、娘に対して積極的な関わりを持とうとしない態度であると認知している傾向があると考えられるため、〈放任〉タイプとした。第5クラスタは、5つのクラスタのなかで、「否定的養育態度」得点、「服従的養育態度」得点、「保護的養育態度」得点がいずれも高いという結果となった。このクラスタは、母親の養育態度を、娘に対して時に口出しをし、自分の言うことを聞き、心配をされることが多いと認知している傾向があると考えられるため、このクラスタを〈干渉〉タイプとした。

母親に向ける感情・認知尺度（青年期版・思春期版）得点の母親の養育態度タイプ間比較

母親の養育態度タイプによる母親に向ける感情・認知尺度（青年期版・思春期版）の下位尺度得点の比較を行うため、1要因分散分析を行い、多重比較を行った(Table 5)。結果、母親に向ける感情・認知尺度の（青年期版）および（思春期版）の両方において、3つの下位尺度すべてにおいて、タイプ間の差がみられ、思春期においても青年期においても、否定的な養育態度の側面が高く認知されていない〈保護〉タイプ、〈中間〉タイプ、〈放任〉タイプが母親に対する信頼を抱いていることが明らかとなった。母親から保護されているという側面だけを高く認知している〈保護〉タイプは他のタイプより母親に対する信頼が高

Table 4 各クラスタの母親の養育態度尺度得点

クラスタ名	①第1クラスタ 〈否定〉タイプ		②第2クラスタ 〈保護〉タイプ		③第3クラスタ 〈中間〉タイプ		④第4クラスタ 〈放任〉タイプ		⑤第5クラスタ 〈干渉〉タイプ		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
否定的養育態度	2.85	.49	1.45	.31	2.04	.36	1.30	.42	3.06	.42	236.88	①=⑤>③>②>④
服従的養育態度	1.33	.40	2.25	.53	2.06	.33	1.43	.35	2.85	.59	87.99	⑤>②>③>④>①
保護的養育態度	1.52	.50	3.34	.45	2.30	.35	1.77	.54	3.00	.60	144.05	②>⑤>③>④=①

Table 5 各クラスターの母親に向ける感情・認知尺度（青年期版・思春期版）得点とF値、多重比較

クラスタ名	①(否定)タイプ		②(保護)タイプ		③(中間)タイプ		④(放任)タイプ		⑤(干渉)タイプ		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
信頼(青年期版)	2.52	1.25	4.98	.81	4.02	1.00	4.24	1.38	2.90	1.30	33.33	②>③,④>①,⑤
対立感情(青年期版)	4.04	1.19	2.21	1.20	2.95	.98	2.03	1.12	3.18	1.32	20.96	①>⑤,③>②,④
1人の人間としての親認知(青年期版)	4.62	1.08	4.85	.94	4.13	1.00	4.48	1.36	3.31	1.47	12.23	②,①,④,③>⑤,②>③
信頼(思春期版)	2.42	.97	4.53	.98	3.70	.94	3.79	1.26	3.01	1.18	23.49	②>③,④>①,⑤
対立感情(思春期版)	4.34	.82	2.60	1.09	.84	.84	2.50	1.16	3.47	1.34	18.76	①>⑤,③>②,④
1人の人間としての親認知(思春期版)	4.28	.94	3.93	1.01	3.52	.82	3.69	1.24	3.21	1.15	5.67	①,②>⑤,①>③

かった。しかし、同じく保護的な側面を高く認知している〈干渉〉タイプは、母親に対する信頼は低かったことから、否定的な養育態度の側面の認知の高さが母親に対する信頼に影響しているのではないかと考えられる。

母親に対する対立感情においては、思春期と青年期のどちらにおいても否定的側面を高く認知する〈否定〉タイプが他の4タイプより対立感情を抱えていることが示されている。同じく否定的な側面を高く認知する〈干渉〉タイプも、〈保護〉タイプや〈放任〉タイプより母親に対して対立感情を抱いており、母親に対する対立感情と否定的な養育態度の側面の関連が示唆された。

母親を1人の人間として認知することについては、青年期では〈干渉〉タイプが他の4タイプより認知していないことが示された。このことから、母親が過度に口出しをしているように認知している娘は、青年期になっても母親を1人の人間としてみるものが難しいのではないかと考えられる。

母親の養育態度のタイプごとの思春期版と青年期版の母親に向ける感情・認知尺度の得点の比較と相関

娘が思春期から青年期へと成長することで、母親に向ける感情や認知が変化するのか検討をするため、母親の養育態度のタイプごとに思春期版と青年期版の母親に向ける感情・認知尺度得点の平均値の差を検討した (Table 6、Table 7、Table 8)。また、母親の養育態度のタイプごとの母親に向ける感情・認知尺度得点 (思春期版・青年期版) の相関を Table 9、Table 10、Table 11、Table 12、Table 13 に示す。

Table 6 各タイプの「信頼」得点の平均値および標準偏差、t 値

	青年期		思春期		t 値
	M	SD	M	SD	
〈否定〉タイプ	2.52	1.25	2.42	.97	.51
〈保護〉タイプ	4.98	.81	4.54	.98	5.26***
〈中間〉タイプ	4.01	1.00	3.70	.94	5.19***
〈放任〉タイプ	4.24	1.38	3.79	1.26	5.36***
〈干渉〉タイプ	2.90	1.30	3.01	1.18	-.77

*** $p < .001$

Table 7 各タイプの「対立感情」得点の平均値および標準偏差、t 値

	青年期		思春期		t 値
	M	SD	M	SD	
〈否定〉タイプ	4.04	1.19	4.34	.82	-1.20
〈保護〉タイプ	2.21	1.20	2.60	1.09	-3.13***
〈中間〉タイプ	2.95	.98	3.12	.84	-2.21*
〈放任〉タイプ	2.03	1.12	2.50	1.16	-5.00***
〈干渉〉タイプ	3.18	1.32	3.47	1.34	-1.91

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 8 各タイプの「1人の人間としての親認知」得点の平均値および標準偏差、t 値

	青年期		思春期		t 値
	M	SD	M	SD	
〈否定〉タイプ	4.62	1.08	4.28	.94	1.57
〈保護〉タイプ	4.85	.94	3.93	1.01	8.58***
〈中間〉タイプ	4.13	1.00	3.52	.82	8.17***
〈放任〉タイプ	4.48	1.36	3.69	1.24	7.15***
〈干渉〉タイプ	3.31	1.47	3.21	1.15	.74

*** $p < .001$

Table 9 〈保護〉タイプの母親に向ける感情・認知尺度（思春期版・青年期版）の相関

	信頼 (青年期版)	対立感情 (青年期版)	1人の人間としての 親認知(青年期版)
信頼(思春期版)	.70**	-.21	.05
対立感情(思春期版)	-.10	.58**	.12
1人の人間としての 親認知(思春期版)	.27*	-.14	.56**

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 10 〈中間〉タイプの母親に向ける感情・認知尺度（思春期版・青年期版）の相関

	信頼 (青年期版)	対立感情 (青年期版)	1人の人間としての 親認知(青年期版)
信頼(思春期版)	.77**	-.11	.56**
対立感情(思春期版)	-.03	.60**	.20*
1人の人間としての 親認知(思春期版)	.42**	.18	.64**

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 11 〈放任〉タイプの母親に向ける感情・認知尺度（思春期版・青年期版）の相関

	信頼 (青年期版)	対立感情 (青年期版)	1人の人間としての 親認知(青年期版)
信頼(思春期版)	.86**	.06	.59**
対立感情(思春期版)	.20	.76**	.32**
1人の人間としての 親認知(思春期版)	.55**	.18	.74**

** $p < .01$

Table 12 〈否定〉タイプの母親に向ける感情・認知尺度（思春期版・青年期版）の相関

	信頼 (青年期版)	対立感情 (青年期版)	1人の人間としての 親認知(青年期版)
信頼(思春期版)	.69**	.14	.24
対立感情(思春期版)	-.01	.33	.11
1人の人間としての 親認知(思春期版)	-.11	-.07	.48*

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 13 〈干渉〉タイプの母親に向ける感情・認知尺度（思春期版・青年期版）の相関

	信頼 (青年期版)	対立感情 (青年期版)	1人の人間としての 親認知(青年期版)
信頼(思春期版)	.80**	.23	.64**
対立感情(思春期版)	.22	.77**	.43**
1人の人間としての 親認知(思春期版)	.79**	.63**	.84**

** $p < .01$

〈保護〉タイプでは、「信頼」および「1人の人間としての親認知」において、青年期の方が平均

点が高く (Table 6、Table 8)、中程度の正の相関が見られた (Table 9)。「対立感情」において、思

春期の方が平均点が高く (Table 7)、中程度の正の相関があった (Table 9)。〈中間〉タイプでは、「信頼」および「1人の人間としての親認知」において、青年期の方が平均点が高く (Table 6、Table 8)、正の相関があった (Table 10)。「対立感情」において、思春期の方が平均点が高く (Table 7)、中程度の正の相関が見られた (Table 10)。〈放任〉タイプでは「信頼」と「1人の人間としての親認知」において、青年期の方が平均点が高く (Table 6、Table 8)、強い正の相関が見られた (Table 11)。「対立感情」において、思春期の方が平均点が高く (Table 7)、強い正の相関があった (Table 11)。〈保護〉〈中間〉〈放任〉タイプといった否定的な側面や服従的な側面を娘が高く認知していない養育態度は、母親からの過度な関わりがなく、あったとしても娘を保護するようなものであったと推測される。そのため、第2次反抗期を終え娘が自分のアイデンティティを確立していこうとするなかで、思春期より母親への対立感情は低くなり、母親を1人の人間として認知し、信念や考え方のモデルとすることが考えられる。落合・佐藤 (1996) は、思春期と青年期の親子関係の違いについて、子が青年期になると親が子を1人の人間として頼りにする関係へと変化するとしている。このことから、親が子を1人の人間として信頼し、認知していることで、子も親を信頼すると同時に1人の人間として認知していくようになるのではないかと考えられる。

〈否定〉タイプと〈干渉〉タイプでは、3つの因子得点において、青年期と思春期の間に有意な平均値の差は見られなかったが、〈否定〉タイプでは、「信頼」において中程度の正の相関があった (Table 11)。また、「1人の人間としての親認知」において中程度の正の相関が見られた (Table 11)。また、〈干渉〉タイプでは、「信頼」において強い正の相関があった (Table 6)。また、「対立感情」において強い正の相関が見られた (Table 12)。「1人の人間としての親認知」においては、強い正の相関があった (Table 12)。否定的な側面が高く認知されている〈否定〉タイプと〈干渉〉タイプは、娘の成長による母親への感情や認知の有意な変化がないことが明らかとなった。母親に向ける感情・認知尺度の下位尺度得点を見ると、〈否定〉タイプおよび〈干渉〉タイプは、青年期において、

他の養育態度タイプより「信頼」の平均点が低く (Table 6)、「対立感情」は高い得点となっており (Table 7)、思春期においても、他の3つのタイプより高い得点となっていた。このことから、母親の否定的な養育態度の側面が強く認知されると、娘は反抗期を過ぎてても否定されたという記憶が離れず、自分を否定した母親への信頼は低く、対立感情は高い状態が保たれていると考えられる。片田 (2019) は、母親が過度に口出しをすることにより、娘は自分に自信がなくなり、母親の意図を汲むような行動がみられるとしている。このことから、「1人の人間としての親認知」が変化しなかった点について、母親に対する屈折した感情はあるものの、母親の意見なしでは決断ができず、母親と自分の分離ができていないことが理由である可能性が示唆される。〈否定〉タイプの娘のみ「対立感情」において、思春期と青年期の間に相関がみられなかった。このことから、否定的な側面を強く認知している娘は、母親への対立感情の一貫性がない可能性が示唆された。また、別の可能性として、片田 (2019) の支配的な親を持つ娘の事例でもあるように、母親の否定的な側面を強く娘が認知している場合、母親への対立的な感情を大人になってから抱くことがあり、本研究では、思春期に対立感情を抱いていなかった娘が、青年期に対立感情を抱いた可能性が考えられる。母親の養育態度において、否定的な側面だけを高く認知している娘は、対立感情を抱く時期が明確でないと考えられる。

総合考察

娘が認知する母親の養育態度を捉える新たな尺度を作成した。結果、「否定的養育態度」「服従的養育態度」「保護的養育態度」の3つの下位尺度が得られた。娘が母親に向ける感情・認知尺度については、「信頼」「対立感情」「1人の人間としての親認知」の3つの下位尺度が得られた。思春期においては、「対立感情」と「1人の人間としての親認知」の間に正の相関があり、青年期においては示されなかった。心理学辞典 (1999) では思春期を既存の権威に反発し自らの個別性を主張する時期であるとしていることから、母親への対立感情が高いほど反発が大きく、娘が自己を主張

するために、それまで混在していた母親と自分の存在を個別化し、母親を1人の人間として認知しようとするのではないかと考えられる。

本研究で抽出された「否定的養育態度」「服従的養育態度」「保護的養育態度」の3つの側面を総合的に捉えタイプ分けした。その結果、否定的側面だけを高く認知する〈否定〉タイプ、保護的側面だけを高く認知する〈保護〉タイプ、どの側面も中程度認知する〈中間〉タイプ、どの側面も低く認知する〈放任〉タイプ、どの側面も高く認知する〈干渉〉タイプの5つのタイプに分けられた。

各養育態度タイプの母親に向ける感情・認知の変化を検討した結果、否定的な養育態度の側面の認知の高さによる、母親に向ける感情・認知の変化のあり様を示された。否定的な側面を高く認知している〈否定〉タイプや〈干渉〉タイプは、母親への信頼や対立感情、母親を1人の人間として認知することにおいて、思春期から青年期へと成長することでの変化はみられなかった。「信頼」や「対立感情」が変化しなかったことについて、否定的な養育態度を高く認知している娘は、母親に自分を受け入れられたという実感がなく、むしろ自分の考えや行動を否定されているように感じていると推測される。そのため、第2次反抗期を終えても、自分を否定してくる母親に対して、対立感情を強く抱いている可能性がある。また、自分を受け入れようとしないう母親に対して、青年期においても信頼することが難しいという可能性が示唆されるであろう。「1人の人間としての親認知」が変化しなかったことについて、否定的な態度をとられてきたと認知している娘は自分に自信がもてず、香山(2010)が言うように母親の意思などを汲んでいる可能性がある。そのため、娘は青年期になっても母親がいてこそその自分となってしまう、母親を1人の人間として認知することが難しいのではないかと考えられる。服従的な側面が強い場合には、否定的な態度とは立場が逆となり、自分の言うことを聞き、なんでもやってくれる母親であるために、娘は母親と自分を一体化させている可能性がある。そのため、母親と自分を別の存在として認知することが難しいと考えられる。

〈保護〉タイプ、〈中間〉タイプ、〈放任〉タイプにおいて、「1人の人間としての親認知」では、思春期と青年期の有意差が示された。水本・山根

(2011)は、母親との心理的分離について、母親との安定した愛着がある密着型が、母親との心理的分離をして自立型に移行するというプロセスを示している。有意差が示された3つのタイプは、母親に対する信頼が成長するにつれて高くなっており、対立感情は低くなっていた。特に青年期の信頼については最大値が6点に対し、どのタイプも平均値が4点以上となっており、母親への信頼は高いため、母親との安定した関係が築かれている可能性が高い。そのため、〈保護〉タイプ、〈中間〉タイプ、〈放任〉タイプの娘は、水本・山根(2011)が示したプロセスのように、母親との信頼関係を基盤として心理的分離をしていくという適応的な発達をしていくと推察される。また、本研究では、〈否定〉タイプにおいて、思春期と青年期の間に有意な差はなかったものの、「1人の人間としての親認知」の尺度得点の平均値は、思春期においても青年期においても高い得点を示していた。このことから、否定的側面だけを強く認知している場合、母親に対する対立感情の高さや信頼の低さから、自分と母親を別の存在であると認知しようとするのではないかと考えられる。

本研究の課題として、母親の養育態度の変化を検討することが挙げられる。本研究においては母親の養育態度を一貫したものであると想定して検討を行った。落合・佐藤(1996)では、子からみた親子関係は子の発達段階によって変化していることが挙げられている。親子関係の変化は、子の成長や家族以外との関係だけでなく親の養育態度の変化も要因の1つとして考えられる。そのことを踏まえると、本研究で取り上げた娘の思春期と青年期においても、親を頼る時期である思春期と、就職や1人暮らしなどを機に社会の一員として生活を始める青年期では、母親の養育態度も変化する可能性が示唆される。そのため、娘の母親に対する感情・認知だけでなく、母親の養育態度の変化も考慮して検討していく必要がある。また、本論文では居住形態を取り扱わなかったが、娘が青年期になると、大学や就職をきっかけとした1人暮らしや寮生活などで母親との物理的距離ができると思われる。母親に向ける感情・認知は娘の成長だけでなく、現在の母親との物理的距離も影響してくると考えられる。そのため、居住形態も考慮した検討が必要であろう。

引用文献

- 赤坂 徹・丸木和子・鈴木五男・根津 進
(1984). 田研式親子関係診断テストの再評価
—第1報 健康な小学生・中学生とその両親
による再標準化について 心身医学, 24,
480-486.
- 海原順子 (2008). 家族のなかの弱者と強者—読
売新聞「人生案内」より— 集英社
- 片田珠美 (2019). 子どもを攻撃せずにはいられ
ない親 PHP新書
- 香山リカ (2010). 母親はなぜ生きづらいか 講
談社現代新書
- 小高恵 (1998). 青年期後期における青年の親へ
の態度・行動についての因子分析的研究 教
育心理学研究, 46, 333-342.
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期
への移行期における母娘関係—「母子関係に
おける精神的自立尺度」の作成および「母子
関係の4類型モデル」の検討— 教育心理学
研究, 59, 462-473.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎
算男・立花政夫・箱田裕司 (1999). 心理学
辞典 有斐閣
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係からみた
心理的離乳への過程の分析 教育心理学研
究, 44, 11-22.
- 品川不二郎・品川孝子 (1958). 田研式親子関係
診断テスト 日本文化科学社
- 富吉素子 (2011). 母親の娘に対する支配性の問
題 別府大学紀要, 52, 43-54.

みわ かなこ (きもとメンタルクリニック)

ふじさき はるよ (昭和女子大学生生活機構研究科心理学専攻(特任教授))